

# 東日本大震災をいかに乗り越えるか —福島県における子どもの実態と保育の研究 II—

増田まゆみ\*<sup>1</sup> 大澤 力\*<sup>1</sup> 岩田 力\*<sup>1</sup> 川合貞子\*<sup>1</sup> 細田淳子\*<sup>1</sup>  
関 章信\*<sup>2</sup> 生駒恭子\*<sup>3</sup> 伊藤久美子\*<sup>4</sup> 高荒正子\*<sup>5</sup>

## How to get over the Great East Japan Earthquake A Study of the actual conditions on Children and care for Children in Fukushima prefecture (Part2)

Mayumi MASUDA, Tsutomu OSAWA, Tsutomu IWATA, Teiko KAWAI, Junko HOSODA,  
Akinobu SEKI, Kyouko IKOMA, Kumiko ITOU, and Masako TAKAHARA

### 1. はじめに

平成23年3月11日の東日本大震災から、3年という月日が過ぎ去った。放射能汚染という目に見えないものとの闘いが続くという厳しい状況下で、保育所や幼稚園での震災後の保育は、様々な困難への工夫をしつつ営まれている。除染等対応がなされ、戸外で活動時間が次第に拡大するなど、変化は見られるものの、根本的な解決には至っていない。

平成24年度では、以下の3つの取り組みについて報告した。

A: 1. 福島県内モデル幼稚園(2園~福島市・いわき市)・保育園(2園~福島市・本宮市)での保育環境・保育の内容の観察及び保育者及び保護者へのグループインタビュー調査)

B: 放射能汚染対応の先行事例研究=広島(原爆投下後の復興)文献・聞き取り調査;ベラルーシ(チェルノブイリ事故後の復興)文献・実踏調査を実施することにより、子どもの成長・発達に関わる研究成果や保育実践状況の把握

C: モデル幼稚園での保育実践

モデル園の実態把握(子ども・保育、保護者・保育者の意識等)に基づく保育実践~自然物(落ち葉)を使った遊びを中心とする活動として設定し、身体を十分に動かすことと人とのつながりを豊かにする保育となるよう配慮して、学生(研究員である大澤・増田の卒業研究・ゼミナール履修者・大学院生)と教員が協働して計画・準備・保育実践・評価に取り組む。

インタビュー等で明らかになった「これまでの当たり前になされていたことができない、除染には限界があり様々な制限ある生活を送らざるをえない、戸外での活動が制限される、自然に触れ合い身体を十分動かすことが難しい」等の状況での保育実践の意義・効果と課題。

### 2. 目 的

平成24年度のモデル園での保育実践により、自然物を用い、五感を刺激しながら、身体を十分に動かす活動を、友だち、保育者、家族等人との関わりを生み出すことの重要性が明らかになった。除染が進み、またモデル園それぞれの変容する保育と関連をもちながら、24年度の実践を活かし、継続性のある、また、学生の多様な力が発揮できるような取り組みを、モデル園、学生、養成校教員とが協働して実施することが求められる。

保育所や幼稚園での保育実践に、多様な人とのつながりをもつきっかけを保育者・学生・養成校教員が協働しているか、また、実践に当たっての具体的な内容・方法等を明らかにすることが本研究の第1の目的である。さらに、福島における子どもや保育の実態とその検討・分析により、保育における2つの「新・真」、すなわち、原発事故という人工的、かつ、我が国が経験したことのない状況(新)からの学びが、子どもの育ち・保育においてどのような変化があっても変えてはならない基本(真)とは何かを明らかにすることとつながることを明らかにすることが第2の目的である。

### 3. 研究対象及び方法

#### 1) 研究対象

平成24年度に引き続いて福島県内の、放射能汚染が課題となっている、福島市(幼稚園・保育所)、いわき市(幼稚園)、本宮市(保育所)の4園をモデル園とする。

#### 2) 研究方法

福島県内の4モデル園の継続的な協力を得て、平成24年度の保育実践の評価に基づき、モデル園の園長・副園長・主任等管理職と教員及びリーダー学生との打ち合わせにより、計画を進める。

その際、1年目の保育研究の成果を活かし、人との関わ

りを広げていく保育への取り組みとなるよう進めた。

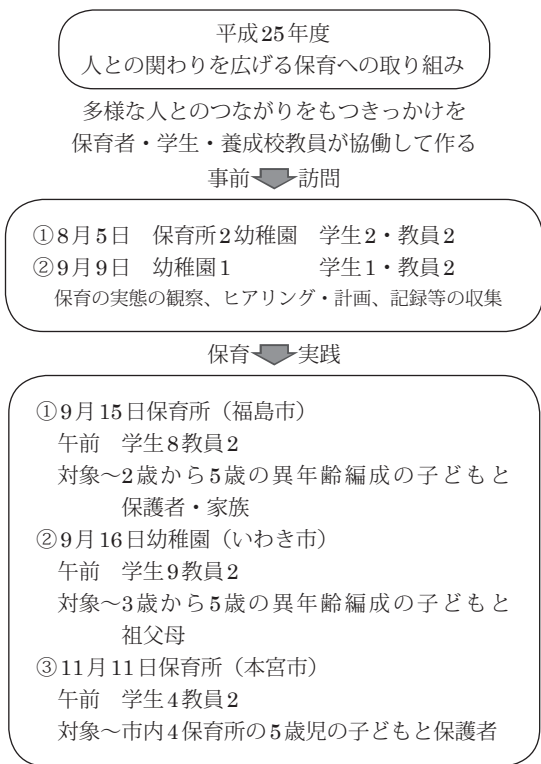
【研究期間】 平成25年4月～平成26年3月

【倫理的配慮】

本研究に際し、訪問時、研究の目的・方法を確認し、保育のビデオ・写真撮影、話し合いの記録をとることの理解を得、研究以外には使用しないこと、個人が特定されるような表記はしない等、個人情報の取り扱いに十分配慮した。

4. 結果と考察

今年度は、保育の連続性、協働性を大切にしながら、共通のテーマとして「年齢や生活の場を越えた子ども相互の関係、子どもと大人（保育者・親・祖父母・友だちの親・学生）との関係等、人と人との関わりの広がり」であった。人との関わりを、「同一年齢クラスから異年齢編成へ、保育者と友だちとの関係から家族と共に」、「一つの園から地域の複数の園の親子へ」、また、「保護者（親）から祖父母へ」とそれぞれ、平成24年度の実践を基盤に広がりある状況の中で取り組んだ。1年間の取り組みの流れは、下記の通りである。



1) 訪問調査

保育実践前の訪問調査は、保育者・学生・教員が協働する保育を実施するために、子ども・保育の実態の把握、特に、園として、また保育者の意向を受け止めながら取り組んだ。

2) 保育実践

24年度の保育実践との違い、特に人間関係の広がりから視点を当てた3つの保育実践の概要は以下の通りである。

(1) モデル保育園（福島市）

事前の訪問調査により、除染が進み30分間、限定された範囲ではあるものの戸外活動も行われるように変化していた。また、休日等は親子で遠方に出かけることや屋内での活動がほとんどであり、多様な人との関わりや思い切り身体を動かす経験が少ないことは、平成24年度と大きく変わっていない状況にあった。

平成24年度は、年齢別の2クラスで、落ち葉と触れ合い、身体を十分動かすことで構成されたプログラムでの保育実践であった。

25年度の取り組みの概要は以下の通りである。

(i) 多様な人との関わりの方となるように

- 同一年齢クラスでの活動から異年齢編成（2, 3, 4, 5歳）へ
- 活動の対象は子どもから親子へ

そこで、父親も含めて親子で参加しやすいように休日に実施すること（職員の出勤体制の変更等園の理解があって可能となった）となり、保育実践の趣旨とともに参加申し込みについて、園から保護者へ周知した。2歳児3家庭、3歳児6家庭、4歳児4家庭、5歳児4家庭から希望がだされた。

その結果、親子、友だち相互、保護者相互の関わり等、多様な人と関わり、多様な経験をする場となった。

(ii) 保育環境の工夫・配慮等

- 休日に実施することから、園舎内のほとんどを廊下も含めて多様なスペースを活かす環境～子どもも大人も思わずきたくなる、やってみたくなる環境～
- 感覚を駆使し、全身を動かす、自然物を活かした制作、友だちや家族、学生等との多様な関わりを可能にする環境

事前調査での検討後、学生（4年「卒業研究」を中心に3年「ゼミナール」・大学院生で構成）は、グループ討議を重ねながら計画はじめ準備を重ねた。

保育実践の概要は以下に示す通りである。

- 親子で遊ぼう あすなろの森へ探検に行こう！
- ◆実施日 2013年9月15日（日）
- ◆時間 10:30～12:00
- ◆参加予定人数 2～5歳児とその保護者
- ◆ねらい
  - ・親子で体を思い切り動かし、様々な人と遊ぶことを楽しむ
  - ・森に探検に行くイメージを一人ひとりがふくらませてストーリーを楽しむ
  - 自然物を使った活動を楽しむ
- ◆内容：あすなろの森へ探検に行き、様々な出会いを楽しむ
- ① 双眼鏡づくり…探検グッズづくり







写真4 さあ、森を作ろう



写真5 みんなで森を作ろう

された。

年中児の保護者の方から「来年は年長児ですのもう一度」という期待することばを保育者から伝えられたこと、アンケートに多くの保護者の「親子で楽しめた」、「これからも続けて欲しい」という記述に、成就感と次年度に向けて意欲が高まった。

## (2) モデル幼稚園での保育実践（いわき市）

震災後、戸外での活動が制限され、ほとんどの活動が室内で取り組まれていたが、園庭を再生し、生まれたての里庭での活動が平成25年よりスタートしている。事前のモデル幼稚園副園長（本学大学院生）との話し合いを重ね、学生の思いやアイデアが尊重された。学生は、子どもに関わることは、一人ひとりの“温かさ”を基盤にした責任感が大切であることを認識して取り組んだ。平成24年度は、休日に4,5歳児の保護者・きょうだいが、保育者や学生と共に、落ち葉や木の実など自然物との触れ合い、身体を十分動かすことで構成されたプログラムでの保育実践であった。

25年度の取り組みの概要は以下のとおりである。

### (i) 多様な人との関わりの場となるように～日常保育の連続性に配慮して

○4,5歳児の保護者・きょうだいから3,4,5歳児の祖父母と世代間の拡大へ

震災後、祖父母と共に行う活動が行うことができなかったことから、敬老の日に実施し、ねらいを「1学期にした遊びや夏の経験を取り入れた遊びを祖父母・友だち、学生と一緒に楽しむ」とした。

事前に参加の申込みと、参加者の遊びたいコーナー（4つ）が決まっていた。

海制作：フォトフレーム作り  
山制作：カブトムシ&クワガタ相撲  
川制作：折り紙の川  
まつりごっこ遊び：露店屋さん

事前準備について、園からの詳細な助言が学生のもとに連絡され、学生のアイデア等加えながら準備がなされた。連休のため、実施日2日前に保育者による園児に対する導入活動が行われており、学生は、前日から、ホールの環境設定にあたった。

下記の活動の流れのもとに学生9名（4年「卒業研究」2名を中心に3年7名「ゼミナール」で構成）は、全体、及びコーナーごとの指導案を作成し、保育者と共に保育を展開した。

時間	主な流れ
10:15	・ホールに園児・祖父母が集まる ◎学生のリードで活動スタート
10:20	・コーナー活動
11:20	・活動のまとめ
11:30	・各保育室に戻る

息子に送ってもらい、孫の生活する園を訪れ、一緒に遊ぶことの期待感、喜びが登園の際の祖父母の方々の表情や行動に表れていた。また、見守っている方が多いのではないかという学生の予測を越えて、笑顔で、積極的に周囲の人々とのコミュニケーションをとりながら、孫と動く姿が見られた。園で活動するのは、園児と祖父母であるが、家族の世代間の絆をあらためて作る機会となり、多様な人との関わりの場となっていた。

### (ii) 実践後の保育者・学生・養成校教員との振り返り

#### ◎学生の気づきと学び

○コーナーで使うものを準備したものの、予想がつかずに心配であったが、子どもや祖父母が遊びを作り上げていくのを実感した。

○子どもや祖父母が相互にコミュニケーションをとる姿を見て、達成感と感動を味わった。

○コーナーごとに保育者や学生相互に話し合い、協力し合



写真6 実践前に わくわくする環境を



写真8 祖父母が売り手



写真7 一緒に作ろう お膝の上もうれしいな



写真9 いらっしやい、いらっしやい

う中で、自他の行為を合わせて考える必要性を学んだ。  
 ○遊びの中で子どもが自ら工夫して遊ぶ（焼き鳥を串から外したことでバーベキューになる）等豊かなイメージで遊びを膨らませていくことのすばらしさを感じている。  
 ○子どもたちが折り紙に飽きてきてしまった頃に保育者が魚釣りの環境を加える等状況により環境を再構成することの大切さに気づく。  
 ○子どもの顔も見たことがなく、園の様子も知らず、不安だった。祖父母がまるで保育者のように遊んでくれ、やろうとしたことを予想以上に楽しんでいる姿に安心した。  
 ○他のグループがお祭りグループに行ってしまったときは上手くできなかったと落ち込んだが、お祝儀という保育者のアイデアにより、焼きそばを食べながら相撲で遊ぶなど予想外の姿が見られた。自分も子どもと共に楽しむことの大切さに気づいた。  
 ○製作に飽きて他のコーナーに行ってしまうのが不安だったが、集中して作っていた。もう1つ作りたいという子に、多めに準備をしておいたので応じることができた。子どもが祖父母に任せると場面も見られたが、協力して作っている姿が見られてよかった。

◎保育者・養成校教員が共に考え合う  
 こうした学生自身の気づきや学びに関連づけながら、保育者・養成校教員が保育の状況を読み解いていった。  
 例えば、養成校教員が、相撲のコーナーでのお祝儀が出された場面について、「『相撲はね…』と孫はじめみんなに説明していたこと、お祝儀をもらった孫に『お姉さんに（お祝儀で買い物できるか）ちゃんと聞いてごらん』と言ったこと等学生がその状況を受け入れ、柔軟に対応するというやりとりがなされた」ことを伝える。  
 加えて、保育者が「『お祝儀で買い物をしておつりももらった。』それをどうしようと困った子どもが、保育者に『お金を預かっておいて』と言ってきたこと等」、学生が関わっていなかった保育の状況を伝える。  
 さらに、学生、保育者、養成校教員が対話を重ねながら「ルールは、どんなふうに生まれていったかについて、みんな最初に遊びたくて、みんなで土俵に上がり、誰もズルをしりせず、最後に倒れなかったのが勝ちとなったこと」、「今回はルールありきではなく、自分たちが楽しめるためにルールを発見していったことはこれから運動会に向けては大事なこと」等、保育を読み解くことが続く。



保育者から、「初めはおばあちゃんがお店屋さんをやってくれて、そのおばあちゃんがかけてくれる言葉一つ一つがとても丁寧で、遊び心があり『まけてあげるね』、『大盛りだったら値段少し高くするよ』と言いながら、焼き鳥も美味しく見えるようにうちわで扇いでくれたこと、こうした楽しいエッセンスを加えてくれたから子どもたちも会話ややりとりを楽しくできたこと」が語られる。

保育の展開をプラスに捉えることについて、学生が「祖父母にとって折り紙が難しかった」と言っていたことに対して、保育者は「『折り方の書いてある紙の文字や説明が小さくて見えない』と言っていたこと、『お姉さんたち、おじいちゃんに直接教えてあげて』と伝えたところ、会話ややりとりが生まれたこと、見えなかったことが関わりを生み出し、見えていたら黙々と折り紙を折っている状況になったでしょうね。」と語られた。さらに「今日、ほうとく幼稚園で学生が遊んでくれたことで子どもたちは存分に遊び、そして満足した。子どもたちが今日の終わりの会で『明日だよ、先生。明日またやろうね』と言い、今日の保育が明日へとつながった。」と語られる。

学生は、こうしたやりとりに参加し、自身の思いも語りながら、保育を多面的に見ること、これまでの保育の連続性の上に今日の実践が存在し、また、明日の保育につながっていくことを学んだ。

### (3) モデル保育園の保育実践（本宮市）

事前の訪問調査により、除染が進み次第に、限定された範囲ではあるものの戸外での活動も行われるように変化していた。しかし、子ども同士が地域で遊ぶ等、人との関わりについては震災前に比べ、希薄になっている状況は変わらない。

平成24年度は、年齢別の2クラスで、落ち葉と触れ合い、身体を十分動かすことで構成されたプログラムでの保育実践であった。そこで、所管の教育委員会、4園の保育者や保護者の理解・協力のもと、モデル園の公立1園での取り組みから、市内公立保育所4園の親子が関わる場として保育実践に取り組んだ。

平成25年度の取り組みの概要は以下のとおりである。

(i) 多様な人との関わり場の場となるように～保（保育所）小（小学校）連携を視野に入れて

学生の授業・教員の業務等の都合から、平日しかも月曜日の実施となった。親子が十分動くことが可能な広い会場が確保され、また、それぞれの園が、参加希望を募り、連絡調整をするなど連携していただくことで実現した保育実践である。

当日参加した学生が4名（4年2名、3年1名、大学院生1名）と少人数であったのは、3年次の教育（幼稚園）実習と日程が重なっていたためである。準備の段階では、3年次も参画していた。4ヵ月半後に小学校就学を前に、地域の多

くの5歳児、及びその保護者が出会う場として、無理なく関わりが深まっていくことの可能なプログラムを準備した。

### 「親子で遊ぼう！～どうぶつのもり～」指導案

日 時：平成25年11月11日（月）9：30～  
 場 所：福島県本宮市の軽運動場  
 対 象：5歳児42組の親子、8名の子ども  
 〈ねらい〉  
 ・体を思い切り使って遊ぶことを楽しむ  
 ・仲間と協力をして一つのことを達成する喜びを味わう  
 ・動物たちの話を聞き、外の落ち葉や木々の変化などに冬の訪れを感じる  
 ・地域の友達やその保護者と触れ合うことを楽しみ、小学校入学への関心を持つ  
 〈内容〉  
 ・どうぶつのもりの動物たちと一緒にゲームをする  
 ・様々な人との交流を楽しむ

### ◎子ども・保護者の姿

会場に到着すると、それぞれの園の親子が自然と近く集まり、談笑している。まず、保護者と一緒に壁に葉（落ち葉・紙で製作したもの）を貼ることを楽しみながら、会場を参加者みんなで作っていくようにする。貼り終わったら、所属する保育所の保育者がいる場所に集まった。

やがて、初めて出会う友達がいる等動物（学生）たちが、これから始まる活動に期待感もてるように話をする。「アイスブレイクゲーム」で場に慣れたところで、ルールを理解し、動物のまねをすることを園ごとのグループで思い思いに楽しんでいる。その後、「どうぶつの森にいこうよ！」の学生の言葉や友達の動きに合わせてながら、ルールを理解し、他の園の友達や保護者と一緒のグループへと変化していった。「果物運びリレー」10組で編成される5グループで競い合う。この頃になると、園の枠を越えて、リレーに勝つように作戦を練るチームなど、一体感が出てくる。最後に、子ども、保護者、保育者、学生、全員で大きな円になり、「収穫祭のダンス」を楽しみ、終了した。

### ◎市内の4保育所が集う意義

○「園内での子どもと保育者・学生との関係から」「地域の複数の園の年長児とその保護者との関係へ」



●初めて出会う子ども、また親子共に楽しむことが可能な活動  
 ●感覚を駆使し、全身を動かす、協同して取り組む活動  
 ●地域の、やがて小学校で出会う友だちや家族、学生等との多様な関わり



保護者・保育者の新たな気づき（子ども・保護者の姿、保幼小連携の大切さ）

子育て・子育てをめぐる環境の変化の中で、子どもも保護者も地域の中で、さまざまな人が関わり合うことが難しくなっているのは、現代の我が国全体の課題である。

現行の幼稚園教育要領、保育所保育指針、また、平成26年4月に告示された幼保連携型認定こども園教育・保育要領において、いずれも発達と生活の連続性の観点から、幼保小の連携を大切な事項として記述されている。

震災後、避難、放射能汚染など様々な要因で、人との関係が希薄になっていることから、本宮市における4園の公立保育所が集い、就学を前に、子ども、保護者、保育者等多様な人が交流を図る機会となったことは意味がある。

#### ◎学生の学びと今後の課題

参加した保護者のうち34名からアンケートへの回答が得られた。その多くの方々が、5歳児の交流の場の楽しさと必要性及び継続的な実施を記述している。プログラムについては一定の評価をしている。

一方、学生は初めて出会う子ども、保護者が一堂に会する際の、場の環境構成、プログラムのあり方、また、その展開にあたって、伝え方等その難しさを実感している。前述の保護者アンケート及び保育者アンケートにも、交流が深まるようにするための工夫、伝え方等課題として書かれている。

保育者養成校としても、保育者の専門性として、理論に基づく実践力の強化等、養成の内容や方法を改善し、本実践を今後の学生指導に活かしていきたい。

## 5. おわりに

研究2年目、共通のテーマを「年齢や生活の場を越えた子ども相互の関係、子どもと大人（保育者・親・祖父母・友だちの親・学生）との関係等人と人との関わりの広がり」とした。限られた時間での活動であったが、それぞれの取り組みを通して、感覚や身体の動きを含む遊びを通して、人間関係を形成していくという保育の原点に改めて気づかされた。次年度はさらに「地域に開かれた保育」へとつなげていくことが課題である。

震災後3年を経過する平成26年度は、本研究プロジェクトのまとめの年度となる。12月初旬に現地である福島市において、保育学と医学という2つの視点を入れたまとめの一般公開シンポジウムを計画している。日々刻々と変容する子どもたちの姿やモデル園の状況をよりの確に受け止めつつ、日常保育と深く関連をもちながら、継続性を有し、学生の多様な力が発揮できるような取り組みを探り、本実践研究をさらに推し進めていきたい。

また、本年度明らかになった、福島における保育の分析が、就学前の保育の「真」どんなに時代が変わっても変えてはならないものと、「新」時代の時変化と共に変えなく

てはならないものをさらに検討していきたい。

誌面の都合上、平成25年度の一モデル園での保育実践及び福島の保育について考え合う場として実施した本学学園祭におけるシンポジウムについては、その一端を付記しておく。

1) モデル幼稚園（福島市）において「なんだろBOX～箱の中には何が入っているかな?～」のテーマのもとに、平成25年11月11日（月）に4歳児3クラス61名を対象に実施した。

限定された福島訪問時間の中で、降園前の慌ただしい時間での実践となった。

事前の園との話し合いにより、除染を徹底し、園庭での活動が可能になったが、五感を駆使しての多様な活動、子ども相互の関係の形成の重要性を確認してのプログラムであった。

ねらい

- ・5感を使い、体全体で活動を楽しむ
- ・友達と協力をして取り組む楽しさを味わう内容
- ・「聴覚の箱」「視覚の箱」「触覚の箱」を使った遊びを楽しむ
- ・フィーリングロードでは、様々な感触の異なる道の上を歩き、道による感覚の違いを楽しむ

## 2) 一般公開シンポジウム「福島の保育～東日本大震災を乗り越えていくために～」の開催

目的：震災直後から継続して被災地と関わりを持ちつつDVD「その時、保育園は」を作成した天野氏、モデル園の保育者及び保護者、本学教員が語り合い、東日本大震災を乗り越えて、福島の保育から学び、改めて日本の保育を構築していくために、保育に関わる者、子育てに関わる者一人ひとりが取り組み可能なことを学生や市民と共に考え合うことを目的とする。

日時：2013年10月27日（日）13:30～15:30

開催場所：東京家政大学板橋校舎〈緑苑祭〉

シンポジスト：天野珠路（日本女子体育大学准教授）・大澤力（東京家政大学教授）・高荒正子（あすなろ保育園園長）・伊藤徹（あすなろ保育園親の会会長）・生駒恭子（ほうとく幼稚園副園長）・蛭田美苗（ほうとく幼稚園保護者会役員）

コーディネーター：増田まゆみ（東京家政大学教授）

### ●主な発言内容：

- ・福島は終わっていない！
- ・将来の健康への不安など計り知れないものがある
- ・できないことを嘆くのではなく、できることを一つでも増やし当たり前に行っていたことが当たり前になる生活へ
- ・今までなかった支援に感謝しつつも、自分たちの努力の重要性
- ・保育の根幹は不変（福島でもどこでも変わらない）
- ・「子どもの最善の利益を保証する（心身の健康）」

増田まゆみ 大澤 力 岩田 力 川合貞子 細田淳子 関 章信 生駒恭子 伊藤久美子 高荒正子

報告書を閉じるに当たって、モデル園の関係各位、シンポジウムの登壇者の方々のご協力に感謝申し上げます。

## 文 献

東日本大震災をいかに乗り越えるか—福島県における子どもの実態と保育の研究 I—東京家政大学生生活科学研究所研究報告  
第36集 2013年7月